

平成23年度

厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励補助金報告書

民族誌学的研究手法を用いた厚岸ニシンの生態環境変化の考察

インディアナ大学大学院人類学科
濱田信吾

Shingo Hamada
Department of Anthropology, Indiana University
Student Building 130, 701 East Kirkwood Avenue
Bloomington, Indiana 47401 USA
hamadas@indiana.edu

目次

緒論	3
研究手法	3
本報告書の構成	4
太平洋ニシン (<i>Clupea pallasii</i>)	5
ニシン漁	5
1. 明治以前	6
2. 明治期.....	7
3. 大正期.....	12
4. 昭和期.....	14
5. 昭和中期：最後の豊漁期.....	16
考察：ニシン生態環境と基盤変化	22
1. 流氷と沿岸海洋生態系	23
2. 港湾開発	26
3. 乱獲	28
結びにかえて	28
謝辞	30
引用・参考文献	30

緒論

厚岸は漁業資源となる魚種と漁法の多様性において道内でも随一であろうが、その種類と資源量は大きく変化してきた。厚岸の歴史を紐解くと、現在の厚岸の漁業は牡蠣やアサリ、昆布そしてサンマなどが重要な水産資源となっているが、以前はニシンが厚岸において最も重要な漁業資源のひとつであった。ニシン資源の回復は、厚岸の漁業従事者にとってさらなる漁業対象となる資源が増えることとなり、零細沿岸漁業者の経済の安定に繋がるものとなりうるかもしれない。

また、ニシンの重要性は、人間社会における経済的観点からに留まらない。アラスカでは、ニシンは海洋生態学的観点そして文化社会的観点から考えても中心的な役割を果たす魚種(Key Species)である(Thornton 他 2010)。Key Species とは、ニシンが海洋生態系の中にある食物連鎖の中で非常な役割を果たして、ニシンという魚の有無がその他の魚種の生態行動そして生存にも大きな影響を及ぼすという考えである。しかし、ニシンの生活史はまだ明らかにされていないものが多く、ニシンのような回遊魚は世界的に見てクジラなどの海洋ほ乳類、市場価格が高いマグロやサケなどの大中型魚に比べると“地味な魚”で、資源保護という議論の中でそれらほどの注目を浴びることはない。しかし、ニシンのような小型魚の海洋生態食物網での重要性は高く、水産学者の中でもその資源管理が唱えられている(Alder 他 2008)。

沿岸生態系の維持のためにニシンという魚が担う役割（最近では生態系機能とよばれる）を理解するためには、種苗生産・放流事業がニシン資源量回復に貢献し始めている最近 20 年ほどのタイムスパンではなく、歴史的にどのようにニシン資源が変動してきたかを人為的環境変化の影響も考慮しながら考える必要がある。漁業資源管理における歴史的環境知識の欠如は、漁業研究者の中で指摘されており、この問題を Roberts (2007)は「誰も古書や昔の報告書に目を通さないために、数十年前に環境に起きていた変化を集団記憶喪失が覆い隠してしまう」、と警鐘をならしている。海洋生態学者は、過去の自然が豊富であった海洋生態系を考慮せず現在の海洋環境の状態を基準とし、それに基づいて資源管理政策を遂行してしまう「基盤変化症候群」shifting baseline syndrome の問題を指摘し、水産資源管理と生態系の理解のための歴史的環境知識の重要性を説いている(Baum and Myers 2004; Papworth 他 2009)。

ニシン生態環境の理解、今後のニシン資源の回復の効果的な資源保護には、ニシン資源が枯渇する以前の厚岸湾や湖内に関する情報収集が不可欠である。ニシン資源が豊富だった頃について直接的経験を持っている方々の知見は、海と陸に刻まれた人間の行動と自然の摂理に間にある継続的相関関係を明らかにするという歴史生態学の観点からも、今度の資源管理を考えていく上で非常に重要な資料となりうる。以上の観点から、本研究は厚岸のニシン生態系変化についての資料を収集し考察を行なった。

研究手法

本研究における調査方法は、文献資料の収集、聞き取り調査、そして参与観察を中心とする。聞き取り調査では、漁師を含む年配の厚岸町住民から聞き取り調査を行い、ニシン資源が枯渇する前の厚岸湖・厚岸湾の環境状況についての資料収集を行なった。インタビューは情報提供者に当時のニシン漁について自由に話していただくもので、事前にリスト化した質問などを設けない形式での聞き取り調査を行なった。

それによって、当時のニシン漁を厚岸の住民の“ローカル”な体験や視点から考察した。報告書作成時点で、合計 11 人の方の聞き取り取材を行なった。録音された聞き取り調査の会話は文字上げされ、発言の内容に基づいて、特に叙述が多く見られた事柄や現象を抽出し考察した。

また研究期間中、聞き取り調査の合間に厚岸におけるニシン漁に関する文献資料の収集を行なった。文献資料は、厚岸町史などからの統計資料などの量的資料から、以前に厚岸の年配者を対象に実施された座談会の記録などの質的資料を収集、そして筆者自身が行なった聞き取り調査や参与観察からの資料とあわせて考察資料とした。聞き取り調査と文献から得られた資料は、近年の厚岸ニシンに関する資料と比較考察に用いた。

本研究の調査区域は、厚岸湖及び厚岸湾周辺とした。厚岸町における資料収集は、主に 2011 年 7 月の 1 ヶ月間とするが、その後の滞在中に継続的に実施している参与観察などからも本研究のための貴重な資料を得ることが出来た。参与観察とは民族誌学的フィールドワークの核となるものであるといえ、それは当事者(漁師)と行動を共にすることによって、出来る限り当事者の感覚から研究課題となるものを考えていくというものである。筆者は、厚岸漁業者の許可のもと、陸からだけではなく船上からも厚岸湖湾の状況を観察し、ニシンの生態史について考察した。

これら民族誌学的フィールドワークに基づいた質的調査は、沿岸環境史を考える上で非常に有意義な情報を提供することができる。中でも、その沿岸地域に長く生活してきた人々がもつ環境知識は貴重は情報である。特に海と付き合いながら生活してきた漁業者の方々は、沿岸水域の観察を意識的にも無意識的にも行なっている。どこにどのような沿岸海洋生物が特にいつ見られるのか、またそれはどのように変化してきたのかという点を考察する上で、漁業者や沿岸地域に長く居住する人々が持つ沿岸環境知識は非常に重要であり、科学的見地の解釈や理解に貢献するものである。科学的知識と地元住民が持つ環境知識を統合することは、今後の厚岸湖・厚岸湾の環境保全にも役立つものである。

本報告書の構成

以下の報告書は、大きく三節に分け構成されている。まずニシンを生物学観点から概略を述べる。続いて、厚岸における沿岸海洋生態系の変化とニシン生態史を考えるために、明治以前から時代別に分けてニシン漁の資料を整理した。明治時代そして明治時代以前については、聞き取り調査よりも文献資料からの情報が多くならざるをえない。しかし大正・昭和初期については、大谷乾次郎の聞き取り調査から当時のニシン漁と厚岸湖湾の環境の様子を探る。そして厚岸でのニシン豊漁期となった戦後からの昭和中期については、今回の聞き取り調査から得る事ができた様々な情報を中心に考える。最後にニシン生態環境変化に関して、三つのトピック(流氷、開発、乱獲)を中心に考察する。そして本研究の問題点と今後の研究の課題を挙げ、本報告書を結んだ。

なお本報告で情報提供者の方の発言を紹介する際は、実際の発言に出来る限り近い形で報告するが、読者のために年代や漁獲量などの単位は当時のもの(石、貫など)から現在のもの(キロ、トン)に換算し掲載した。また、厚岸の住民の聞き取り調査に関する引用文については、既に出版されている文献資料ものからの場合は、情報提

供者の名を記した。しかし、筆者自らの聞き取り調査による情報の際は、情報提供者の匿名性を配慮し、無作為に割り当てたアルファベット(A から M)で表記した。

太平洋ニシン (*Clupea pallasii*)

厚岸で揚げられるニシンは、生物学的には太平洋ニシン(*Clupea pallasii*)とよばれるものである。さらに、太平洋北西部に位置する日本近海を回遊し漁獲されるニシンは、大きく分けて四つのグループに分類される—湖沼性地域型；海洋性地域型；海洋性広域型；湖沼性地域型と海洋性広域型の間中型。厚岸ニシンは其中で、湖沼性地域型ニシンとされている(小林 2002)。主要な餌は動物性プランクトンで、産卵期は春、北海道では3月から6月に沿岸に押し寄せ、一斉に産卵と放精が行う。その際に海面が白くなる現象は郡来(くき)と呼ばれ、それを実際に目撃したものは、漁業者でなくともそれを語り草するほどの光景であり、最近でも石狩湾系ニシンが回帰し郡来が確認されたというニュースは全道ニュースで扱われるほど注目が高い。1年で15cm、5年で30cmほどになり、10年もたつと35cm近くになる。ふ化に要する時間は受精卵が置かれた水温によって異なるが、5度だと約1ヶ月で孵化する。産卵する前に漁獲されると、完熟した魚卵が入った卵巣は数の子やその他加工品として出荷される。

ニシンについて生態学的または資源管理の面でも重要な特徴が二つ挙げられる。まず、ニシンは2、3才魚から産卵が可能となり、複数年産卵することである。つまり、3年魚として沿岸に戻ってきて産卵をするが、もし人間を含む高次捕食者がその魚を捕獲しなければ、その魚はまだ次の年の産卵することが可能である。もうひとつのニシンの資源量変動で重要な点は、「卓越発生年級群」である。卓越発生年級群とは、ある年に稚魚が大量に生まれ、成魚にまで順調に生き残ると、産卵魚となった数年後に特に大きな群をなして沿岸付近に回遊することである。漁獲量が例年に比べて特に大きい年は、この卓越発生年級群が出現したからだと研究者は指摘する。一方で、不漁期にはこのような卓越発生年級群が存在しない(今田 1986)。

太平洋ニシンの生態行動に関する研究は放流事業や栽培漁業技術研究者によって進められている(北海道水産試験場研究報告第62号を参照)。しかし、地域的であれ広域的であれ回遊魚であるニシンが、天然ふ化魚や未成熟魚という成長期にどのような環境条件であるどの海域に生息しているか、また厚岸近海やさらに広い北太平洋海域での高次捕食者とどのような海洋生態食物網の関係にあるのかなど、厚岸ニシンの生活史については未だ解明されていない点が多い。

ニシン漁

厚岸におけるニシン漁の歴史は長い。歴史として記録が残っていない先史アイヌ民族のニシン資源利用を考えれば、厚岸での人間とニシンの関係は何千年に続くといっても過言ではない。厚岸における和人によるニシン漁は、安永年間(1772~1780)からはじまった。本州(内地)での魚粕の需要増加とともに場所請負制の下、厚岸のニシン漁は発展していく。大正時代の漁獲量についての資料は乏しいが、明治時代に数年の大漁年を経験し、大正・昭和初期を経て、日本海側でニシンの来遊が途絶した昭和30年代から、厚岸のニシン漁は脚光を浴びる。そして昭和42年に戦後最高の漁獲高を記録したが、厚岸でもニシンの来遊は昭和45年には途絶した。ここでは文献資料と聞き取り調査からの資料を織り交ぜながら、厚岸ニシン漁の変遷をたどりたい。

1. 明治以前

明治以前のニシン漁に関する資料は、考古学的知見と、松浦武四郎などが残した古文書に頼らざるを得ない。北海道におけるニシンの資源利用は続縄文時代から継続的に行なわれていた(Okada, 1998)。和人によって歴史文献に記録される以前から、厚岸アイヌも刺し網、たも網または引き網などでニシン漁に従事していた可能性は非常に高い。厚岸におけるニシン資源利用の変遷を考察する上で、考古学的資料からの研究を進める必要があるが、沿岸部では魚骨という動物考古学的資料が残りにくく、地形変化も含め発掘研究が難しいという問題がある。

明治時代には、釧路や厚岸の漁業は鮭、ニシン、昆布が三業といわれる主幹漁業であったが、この傾向は場所請負人制度の時代から形成されたようである。厚岸では、安永年間に引き網によるニシン漁が始められている。引き網漁は原則としては禁止であったが、東蝦夷地は松前藩の管理の目が届かないうえ、平坦で砂地が多い沿岸は引き網に適していたため行なわれていた。文化6年(1809)の「東行漫筆」によると、ニシン漁場は明治時代以降ニシン漁が盛んであった場所と同じまたは近い場所に位置していた。ノシャウシコタン(現在の湾月町)、ヲニコエ(若竹町)、ノテト(厚岸大橋南口)タンタカコタン(厚岸大橋北口)リルウとシュショウへ(門静-真龍間)、シンニウイコル(湖北、現在の市役所あたり)ビハセ(琵琶瀬)、などがニシン漁場として記されている。また漁期について、「春海面氷の解を待つて鯡を漁す」と記され、「東行漫筆」には

「氷海に成事年々十二月中に向ひより氷初り潤内大黒しま近迄よりハラサン先より内一円なり。厚四五寸に寄り上を渡る。冬鯧は氷迄也正月中よし。二月に入氷とける故。夫より早速鯧を取初る」

とある。ニシンは結氷期間を除いて年中漁獲することができたようであるが、現在の太陽暦でいう3月から4月、そして9月末頃から12月頃にニシン漁が行なわれていたようである。ニシンは大型のみで、今いう「馬鹿ニシン」など小型のニシンは漁獲していなかったようである(『厚岸町史・上巻』1975より)。その後文化年間(1804~1817)に釧路・根室・国後・斜里などは、建網が行なわれるようになり、霧多布場所でも嘉永年間(1848~1853)には建網の試用がなされている。厚岸でも同時期にニシン漁法の変化が徐々に起こったのではないかと推測される。

明治以前の漁獲高は定かでないが、天保年間(1830~1844)の場所請負人の届書によると、厚岸場所ではニシン3,500石となっている。もしこれが生ニシンであれば、2,625トンという計算になる(1石=750kg)が、これが生ニシンによる石高なのか身欠きニシン(身欠き加工された後であれば、1石=150kgで525トン)の石高なのかは現在の定かでない。また安政4年(1857)の入北記(島義男著)には、その時、ニシンのメ粕が681石、ニシン油が220石の生産があったと記されているので、漁獲量は少なくなかったと考えられる。ニシンは、メ粕や鯧油の他に、丸干ニシン、開きニシン、端ニシン(身欠きを取り去った残り)、数の子、笹目(鯧か校の際取り出したえらを干したもの)、目切(加工する余裕がなく腐敗した鯧をほしたのもの)など加工方法や加工工程の中で分類され、そのうち端に新、白子、笹目、目切は肥料に用いられた(『厚岸町史上巻・上巻』より)。アイヌによる“自分稼ぎ”ニシン漁(谷本2003)を含め明治以前の場所

請負制度下のニシン漁とその漁獲高については、今度も歴史的文献をさらに精査することによって明らかとなることを期待している。

2. 明治期

明治時代のニシン漁に関する資料も、今から 100 年以上前となるため、聞き取り調査から直接伺うことは不可能に近い。そのため文献資料からその様子を伺うことしかできない。明治時代には建網一ヶ統につき 1000 坪など海産干場使用に関する原則規定なども確立されたが、明治 10 年代までは引網だけであった。この引き網時代の明治 14、15 年頃から小鯺の大漁時代がはじまったようである。しかし、30,000 石から 35,000 石（約 22,500~26,250 トン）の漁獲高があった小鯺が沿岸につかなくなっただけからではなく、旋網（キンチャク網）に切り替えた（大谷 1968）。春先の大型ニシンも対象とした刺し網漁も 30 年代から始まり、6 月以降の小ニシンを捕獲するようになってからは建網（行成網から角網）から旋網へと発展するという、一魚種多漁法の様相となっていた。

明治初期のニシン漁獲量について定かではないが、明治 33 年(1900)年に発行された「北海道殖民状況報告・釧路国」によると、苫多では場所請負制時代にニシン場が開かれていたがその後「中絶シテ漁業ヲ行ハス」、しかし明治 10 年代に入り小網によるニシン漁が再開し、明治 16、17 年頃から「大網ヲ用ヒ相応ノ収穫アリシヨリ漸次鯺漁場ヲ増シ又小漁民ノ移住アリ」とある(大谷 1968)。また、現在でもニシン漁を営んでいる門静の漁業者は以下のように述べた。

「門静で一番先に入った人は、明治 5 年に入った清水清松という人。その人が大きな汽船を持って、粕などを内地に運んでた。また内地から北海道で使うものを持ってきたりしてた。最初は地曳き網さ。大地曳き網っていったね。80 人ぐらい使ってたと思う。春ニシン、産卵ニシン獲った後に、今度バカニシンって、小型のニシン、また来年あたり産卵するようなニシンが湾内にいっぱいいたらしい。でそれを獲って、粕を作って、送ってた」(E 氏)

門静では明治初期から既に親方制による大規模なニシン漁が行なわれていたことを示唆している。その他の区域についても、明治 20 年後の真竜は「今日はりっぱな市街をなしているが当時は微々たる漁村であった。しかし小鯺の漁期ともなれば馬市場辺から門静、苫多沖、万別、仙鳳趾古番屋へかけて着業数三十ヶ統におよび、六月上旬から八月末まで、漁夫は千五、六百人も入り込み賑やかなものだった。それだけに漁夫の引揚後は火の消えたようなものだった。綱元は地元が七、八軒にすぎず、他は全部函館辺の資本で経営された」、とある(大谷 1968)。

明治 30 年(1897)の厚岸港輸出入表によると、生ニシン(430 石、約 332 トン)は函館へ、ニシン粕(34,005 石)は函館、東京、四日市、そしてニシン油(5,653 石)は東京、函館、横浜へと輸出されている。日本海側のニシン漁が百万石時代を迎えている頃、厚岸でもニシン漁の規模がさらに発展していったことを伺わせる。

また、当時のニシンの資源量を考える上で拾いニシンという“漁法”がある。中出重郎は以下のように述べている：

「明治三十二年ごろから毎年相当の漁があった。粕にして二千石(300 トン)位。大不漁といっても五~七百萬石(75~107 トン)はあった。値段は百石(15 トン)八百円位。明治四十年の大漁の時は袋十二・三も一網に入ったことがある。こうなれ

ば半分も揚げきれない。あとは全部投げ捨てるか、誰にしてくれるかするのである。こうして、世界に類のない拾い鯨専門の商売ができる。四十年の大漁のとき、私は小ひな丸（三千石積）で敏内へはせた時に見たことだが、鯨が郡来てくると魚は三尺(0.9m)くらい高く飛び上がる、七尋(約 12.8m)もあるドカイで沖揚げが始まる、拾い鯨が三百隻もある、その壮観たるや言語に絶するものがあった。拾い鯨を商売にしているもので百石(75 トン)も拾った者があり、釜の二枚も焚いて製造している」（『厚岸の史実』 p113）

昭和 31 年に行なわれた座談会でも、明治 33 年(1900)以前のニシン漁に関する記録がある。

「ずいぶん鯨の大漁時代が続いた。一網で二百石から獲れたものだ。まったく始末に困る状態だった。拾い鯨で渡世したものさえあった。鯨船では網の魚をわざわざ逃した位の大漁だった。そのために渚の水がくさるくらいだった。古い魚は捨てて新しいものを製造した。袋一つは粕にして百石ある。こんなのを五つも獲ってくるのである。使用の船はサンペといって十七、八人乗りであるこれらの雇は田井台四月末に南部や津軽からやってくる。土地の人は極く少ない。そして、元気いっぱい沖揚げ音頭うを歌って大漁を謳歌したものである」（『厚岸の史実』 p111）

ニシン漁場の様子について高橋五郎も以下のように懐古している：

「学校に通っている当時、（門静）には内地からきた大きな親方が六軒いました。（中略）夏は「引き網」ばかりでした。ひとつの引き網に、船は「サンパ」「ドカイ」という名前でした。サンパには網を積み、ドカイには網を積んだものなんです。当時は百メートル沖から網をかけて岡に引っ張った。魚が入り過ぎて岡に網をあげてなかつたのが多かったです。引き網に袋をつけて、袋がいっぱいになると沖にかけておいた。それを汲みとり船で汲んでいったわけです。汲んできた船を渚に横付けしたんです。「釜場」では、この周辺の女を雇い「モッコ」でしょいあげたもんです」（『古老が語るあつけし昔ものがたり第三集』 p12-13）

沖から引く網は長さが 300 間(約 545m)ほどのものから 500 間(約 909m)まであったという。エンジン船などない当時、その規模の引き網を海におろし 10 本から 50 本ほどもある網で引くという漁法がいかに多くの組織的労働力を要したか想像するに易い。

明治 40 年は特に小ニシンが大漁だったようだが、「この年の魚は大型で非常に厚いものでした」とあるように、冬から春にかけても豊漁であったのではと考えられる(大谷 1973)。ニシン豊漁は明治 41、42 年も続き、泉畏三士は、大漁期に漁師が沖でかがり火をたいて操業していた、と懐古している（『古老が語る“あつけし”昔ものがたり第一集』）。また、明治時代後期の門静におけるニシン漁については田崎栄三郎の談話がある。明治時代後期の門静は拾い鯨で生計を立てていた者が多く、網でニシンを獲っていたのは数少ないと述べている。

「引網時代の拾い鯨は結構商売になったもので、門静の二十軒余の外、太田からも別寒のアイヌたちも毎年漁期にやってくる拾い鯨をやったものである。引網時代の（中略）盛漁期は随分賑わったものだ。網一か統について四十人位のヤン衆が上場所や南部から入ってくるし、粕干しには三十人位の娘さんやおかみさんが太田、真竜、厚岸からやってくるし、一か統七、八十人の人数となり、それが数

か統で何百人の人数となり、建物も番屋、倉庫、網倉などが密集してあり、実に景気のよいものだった」（『厚岸の史実』 p108）

明治末期から大正時代になると釧路国支庁管内のニシン漁の中心は厚岸へと移り、昭和になってからは底引き網や沖刺し網も行なわれるようになり、厚岸湖内では氷下待網漁もはじまった。明治後期の大量漁については多くの叙述が残っており、岩城清太郎は明治時代後期のニシン漁について以下のように述べている。

「六月になれば鯨漁期に入るので函館から約二十カ統の網元連中がやってくる。それに一か統八十人くらいの雇い漁夫が南部からやってくる。また釜焚きや粕干しは地元で募集するが、これも一か統に六十人も入用なので太田村などは一家総出で稼ぎにくる始末。真竜の人口はわずかにふくれあがり急に賑やかになった。明治四十年、四十一年は大々漁で、陸で鯨がすくえるほどの厚い郡来が続いた。大量漁のときには各漁場で「千玉祝」と称するお祝いをやり、仮装行列で待ち回りをして祝杯をあげたものである。また、お盆になると地元の人も雇いの人たちも一緒になって町中が踊りだらけになるというにぎわいを呈したものだ。しかし、こうしたにぎわいも八月末の切り揚げを過ぎると、町は火の消えたような寂しさにもどった。漁網については引き網が長く続き、つぎにアグリ網、キンチャク網を経過して、今日のような定置網、刺し網にと変遷したようである」（『厚岸の史実』 p121）

「六月から始まるニシン漁期」という考えは興味深い。6月でも厚岸湖湾内を回遊していた小型のニシンを獲って粕を作る夏ニシン漁をさしているようである。厚岸では現在夏にニシンが獲れるということはなく、ニシンの生態生活史を考える上で興味深い記録である。

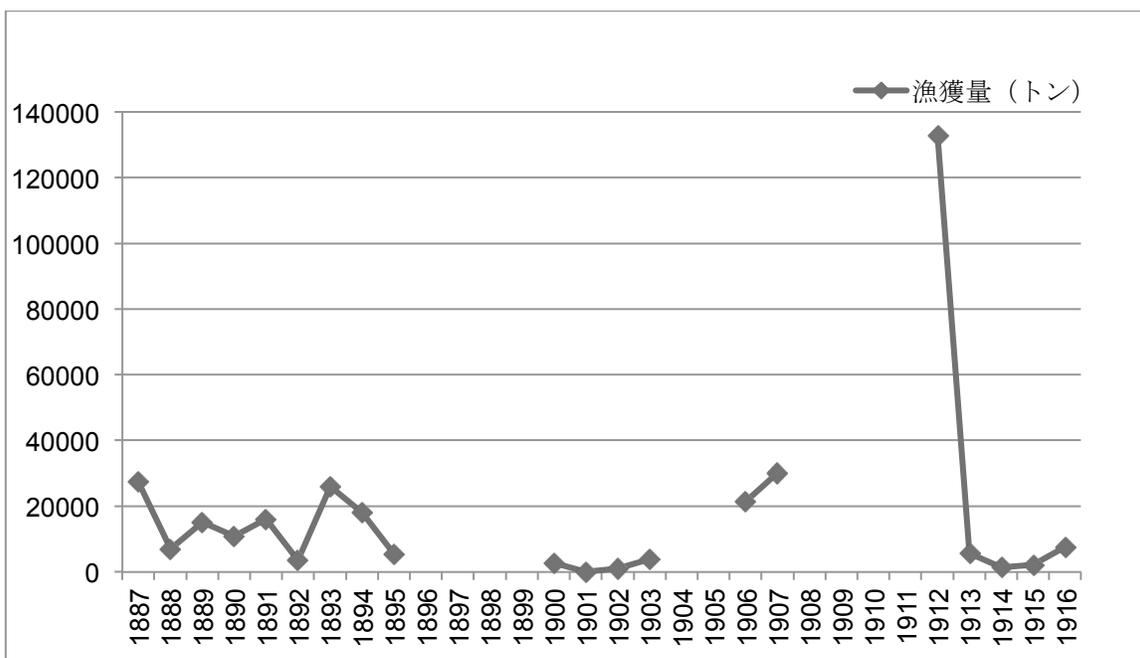


図1 厚岸郡におけるニシン漁獲量(明治期～)

参考までに明治 20 年から大正 5 年までの厚岸郡におけるニシン漁獲量を以下に記した(図 1)。厚岸郡での漁獲量のため、厚岸町のみではなく浜中町そして根室南西部の漁獲も含んでいる可能性が非常に高いことを予め述べておきたい。明治 40、41 年の大漁についての叙述が多かったが、北海道統計から作成された厚岸町史によると大正元年の厚岸郡での漁獲高は 176,942 石(132,706 トン)に及んでいる。厚岸郡の他の地区で歴史的な大々漁が記録された年なのか、卓越発生年級群が発生したのか、それとも表記ミスなのかは定かではない。

様々な漁法がニシン漁に導入される一方、明治後期からは厚岸沿岸部も変化を見せている。昭和年代に行なわれた聞き取り調査で、当時の環境について多く言及されたのは、流氷と採石事業である。氷が近年まで厚岸まで漂流していたことを記憶している人は厚岸にはまだ多いと思うが、明治後期には、湖・湾内の結氷の規模が異なるような気候があったようである。川崎ユケは湖湾内が凍った明治 30 年代について、「正行寺のお坊さん、仙鳳寺まで渡ったと聞いたよ。私の父が馬車追いしてて馬ソリで米積んで湖の中を運んできましたね」、と述べ、泉畏三士も以下のように当時の結氷について回顧している：

「船がよく入ったでしょう。その船が途中で氷にはさまれて動かせないということがよくあったもね。氷渡って仙鳳趾まで行ったんだなあ。それほど湾の中も湖の中も凍ったんだね」 (『古老が語るあつけし昔ものがたり第 1 集』 p11-12)



図 2 昭和 30 年代の厚岸湾結氷の様子。稲葉憲三氏撮影・提供、宮川佳治氏所蔵

ソリなどを使って結氷した上を移動する人々の写真が存在し(図 2)、厚岸湾内が結氷し厚岸湖岸南部から仙鳳趾の距離が氷で鎖された可能性はある。しかし、厚岸湖南から仙鳳趾まで直線的に渡るのではなくと、厚岸湖岸から厚岸湖北地区そして苦多、門静、尾幌と着氷した沿岸を歩いて仙鳳趾まで移動したという意ではないだろうか。また、人々の記憶に在る環境的知識は、特に印象深い現象や事象があった年が強調される可能性があり、湾内がそのように凍ることが頻繁にあったのか、それとも例外的なのかは注意して考える必要がある。

一方、明治時代後期の厚岸の様子を回顧するにあたり多くの古老が、釧路築港のために行なわれた掘削事業と影響について触れている。

「(釧路の)築港建設は明治43年から始まって一番先に子の日公園のところを採ったということなんです。それから大正五年になってバラサンを採ったそうで当時としては随分反対があったそうです。けれど泣く子と地頭に勝てず大正九年までバラサンの石を採ったということです。そして又東亜戦争になってから採ったんだからだいぶ採ったんですヨ。戦後に成って道が苦多をやったりするのにあの辺の岩を砕いて持っていったのが大きく採るといのはそれからなくなったんです」(泉畏三士『古老が語るあつけし昔ものがたり第3集』p52-53)

菅原政太郎は漁業者を主体とした掘削事業反対運動について述べている。

「建網業者が中心になって、バラサン採石反対町民大会を寿座で開いた。その理由とするところは鯁の来遊がなくなること、風景を害なうことなどであった。しかし築港側の強引な無理押しで、相変わらず採石と運搬が続けられたのであります」(『厚岸今昔物語』p50)

そして、金橋善五郎氏夫妻はバラサン岬での採石事業の厚岸湾への環境への影響を指摘している。

「必要量の石材運搬が終るとアトは野となれ山となれで風浪にさらされた丸太組の棧橋はたちまち破壊されてしまったのである。その結果、湾内の風波は高くなって船泊りも困難になり、ノテト(奔渡旧渡船場)付近は欠壊するまでになった。ノテト付近は干場も広く、魚粕は百石以上もほせた所である。高山植物の月滅、小鳥の楽園など有形無形万代にわたる損失は計り知れない大きいものがあり返す返すも残念なことであった」(『厚岸の史実』p91)。

明治時代後期から大正8、9年まで続いた掘削事業で、厚岸湾岸部の地形が大きく変わった可能性がある。そして、『厚岸の史実』で古老は述べた明治後期の不漁の後から続いた不漁について、以下のように述べている。

「また明治三十七、八年から四十二、三年に岩手県からきて小旋網をやったが、これは不結果に終わった。定置網は三十二ヵ統あり、年三四万石をあげたがその後潮流の変化のためか湾内は不振が続いた」(『厚岸の史実』p117)。

一方、年間変動が激しいというニシン漁の特徴は以前から存在したと思われるが、古老らが座談会で指摘した潮流の変化の可能性は注目に値する。潮流の変化は自然的な海況変動によるものかもしれないが、掘削事業による厚岸沿岸線の変化が誘因かもしれない。

3. 大正期

大正期から昭和初期の厚岸のニシン漁そしてニシン漁獲量についての資料は乏しい。しかし、明治 41、42 年の大漁に続き大正初期も豊漁に恵まれた年があったようである。昭和 30 年の聞き取り調査で五十嵐善九郎は、大正 5 年の苫多における引き網の大漁時代は、子供に「小さいタモ(網)を預けておけばいくらでも拾鯨をしてきたものだ」、と述べている(大谷 1996)。大正から昭和にかけてのニシン漁について、佐藤梅太郎は「漁というのは鯨ばかりで冬期間なんですよ。冬期間が、ずいぶん鯨が来たもんですからね。(子のもった、大きいニシンが)もうたいしてあがったもんですよ」、と回顧している(『古老が語るあつけし昔ものがたり第 1 集』 p69)。

「小鯨時代の苫多は賑やかなものでした。全部が曳網で、(中略)私が十九歳の時(大正 10 年)には全部が建網になりましたが、この時はすごい大漁で、拾い鯨ばかりで商売した人もたくさんいました」(『厚岸今昔物語』 p71)

しかし一方で五十嵐は、「四十年前、(中略)小鯨の引網全盛時代は終りに近づき、それでも二、三年は大漁が続いた。そしてそれ以後は建網になり、次第に戸数が減ってきた」、と回顧し、大漁年がありながら引き網から建網へと漁法が変遷していく中、次第と衰退するニシン漁について触れている。また、大正 5 年は大漁であった一方、定置網業者と旋網漁業者の間での対立などがあったことが、昭和 30 年の記録された旋網漁業者の金子定吉の談話に残されている(『厚岸の史実』 p102)。

ニシン漁についての談話はあまり残っていないが、大谷乾一郎や厚岸町教育委員会が行なった古老の聞き取り調査には、厚岸湖湾内での環境に言及するものが多く見られた。沿岸部での採石事業とその後の環境変化などは、古老の記憶に強く残っているようである。

「(大正 6 年の) 鉄道の開通とともに部落は非常に変わりました。現在の海岸は約三百米位侵蝕されているが、当時はそこに粕ほしの干場もあり、人家も海岸違いに密集していたのであります。侵蝕の原因については港湾の施設やら、潮流の変化やら、バラス採取やらが考えられます」(『厚岸今昔物語』 p69)

「浜の欠壊もたいしたもので、大凡真昆布で二タケ干すことができたから山際まで二十六間(約 47.3m)、学校の前なら三十間(約 54.5m)くらいあったし、仙鳳趾へ行くにも浜を歩いたものが。今は宮下の井戸は海のマン中にあるという状態である。なにせ釧路の築港工事が始ってバラス採りがはげしくなってから浜の欠壊が始ったようだ。そして現在もまだ降っても照ってもバラスと砂を採っているから浜は日毎に減っていく。十三本の砂止堤は果して崩壊寸前の苫多をよく救ってくれるだろうか」(五十嵐善九郎『厚岸の史実』 p105)

また栗原久雄もこのように述べている；

「真竜から門静までの海岸の侵蝕は誠に残念なことです。今の武者商店の裏あたりは、昆布で三丈半(約 10.6m)もほしたから二十五間(約 45.5m)ぐらひはあったとおもいます。これがなくなったのは、門静のバラスを採った以外何者でもありません。当時の門静の玉砂利は山のようになっていたものですが、釧路の築港用の材料として、だるま船五隻を花咲丸でひき、数年がかりで運んだので、海岸の

浸食は急速に進みましたが、返す返すも残念なことです」(『厚岸今昔物語』 p30)

海岸線という地形の変化のほかに、厚岸湖湾内で獲れていた魚種の資源量などにも変化があったことが伺われる。佐藤梅太郎は、アキアジの大きいようなサイズのスズキが「雨が降った後によくスズキが獲れた」、「ボラもとれたが、今はまったくみない」など当時の厚岸湖湾における生物多様性と資源量について様々な談話を残している(『古老が語るあつけし昔ものがたり第1集』 p71)。

当時の厚岸湾内の生物多様性を示す古老の叙述で興味深いのは、ウナギについてのものである。ヤツメウナギである可能性があるが、一応紹介しておく。漁業対象としてのウナギの資源量も決して低かったわけではないようで、田口省一郎は以下のように述べている：

「湖内の漁について。私が五年生の頃から別寒辺牛川の川口で、鰻が大量にとれたことがあります。(中略)それは細長い鰻で精々百匁(37g)ぐらいなもので、年に二千貫(7.5 トン)ぐらいもとれましたが、厚岸でも真竜でもあまり買手はありませんでした。年々大きくなって、一尾三百匁ぐらいになってから、魚籠に藻とともに入れ、釧路、帯広に出荷しましたが、段々大きくなって五百匁ぐらいになったら、全然売れなくなってしまいました」(『厚岸今昔物語』 p45)

それほど資源量があったとされるウナギだか、「昔イサダ引きやると鰻のたいてい二本や三本獲ってきたもんですが、今皆目鰻なんてもんはね」(佐藤梅太郎『古老が語るあつけし昔ものがたり第1集』 p70)、と座談会がされた昭和 56 年(1981)頃には厚岸湖内から姿を見せなくなったようだ。甲殻類や水生昆虫、小魚など様々な小動物を捕食するウナギの生活史に影響を及ぼす変化が生態環境に起きていたのか、乱獲によって枯渇したのかは定かではない。

前述したが大正元年の厚岸郡におけるニシン漁獲量は、132,706 トンに及んだ(可能性がある)。しかし大正 2 年は 5,598 トンと前年に比べ大きく落ち込んだ。そこで厚岸では大正 2 年、津川和吉によって北海道のニシンの歴史でも最初となる孵化事業が始められている。

「大正二年鯁の大不漁、漁民は大漁の夢さめてひとしく長溜息した。この時に敢然と建った津川さんは、遠く沖万仙鳳趾まで出掛けて鯁を買い集め、相当数の孵化箱を造って真竜沖に投入した。その後何ヶ月か経いて、海面が青く見えるほど無数の稚魚群がこみ潮に乗って浮遊するようになり、数年ならずして、また鯁の郡来が続くようになった。これは津田さんのお陰であり、彼こそは孵化事業の功労者といっても過言ではない」(『厚岸の史実』 p78)

ニシンの孵化事業は厚岸湖にて大正 10 年頃から水産試験場によって数年間継続して実施された。その事業に携わった金橋薫は以下のように述べている：

「数の子に白ら子をかけたものをシュロに塗り付け、それを穴の空いた箱に入れて湖水に浮かべておく方法であります。私は鯁にも回帰性のあることを信じておりますが、鯁はだんだんと徊遊が増してきたように思いました」(『厚岸今昔物語』 p34)

そして父が孵化事業に携わっていた F 氏は、ニシンの栽培事業について回顧し、その根底には厚岸にとってのニシンの重要性とニシンの「春告魚」としての文化的価値を反映している：

「わしら、7つ8つ子供のころから、試験場でニシンの栽培やってるからね。うちに泊まってね、離れに泊まってね。うちの倉庫から、そういうもの作ってね、こういう箱作って、穴いっぱいつくって、ニシンの栽培やってたよね。数の子とって魚の栽培やってたさ、湖内でね。その頃からやってたね。それから7、8年、10年も経ってからのかな。どんどん、入ってくるようになって。（中略）やっぱニシンは貴重だっちゅうことで、結構二人も三人も来てやるんですよ。その魚は、時期的にくるんだよね。あの頃は産卵になればくるのかな。数の子見れば春だからね。春ニシンにくるのは、ああ これここで栽培してるニシンだな。やっぱお陰あるもんだなって。そらどって入ってくる」

厚岸におけるニシン栽培事業は、日本海側でニシンの来遊が途絶し、その一方で厚岸が戦後ニシン豊漁期を迎えた際、網についてのバラ子を利用したニシン孵化事業は北海道水産試験場によって昭和4年から9年、そして北海道水産孵化場で昭和19年から継続的に行なわれた(坂野 1952)。

ところで大正初期に、厚岸では日本水産捕鯨による捕鯨事業所についての話があがっていたが、ニシンが獲れなくなるという懸念から実現しなかったという談話を泉畏三士が座談会で残している。阿部兵三郎は、イワシクジラやナガスクジラがニシンを捕食するので「鯨がとれなくなるというより、鯨が少なくなるという鯨が入ってこない」、とクジラとニシンの生態系食物網の関係とともにニシンの重要性について見解を述べている(『古老が語るあつけし昔ものがたり第3集』p104)。また、泉畏三士は以下のように述べている。

「昔苦多にフカイカネマツという人がいて“鯨カネ”といていたんです。彼が朝早く苦多の浜を歩いていたらゴォッという音が聞こえてくるんです。ガスの深い朝で近づいてみると鯨が鯨かいわしを追ってるうちに潮が引いてあがってしまったんです。こん棒ももったりしてあばれるのをおさえて捕ってしまったということで、それで“鯨カネ”といったそうです。ここにもずい分死んだ鯨が漂流したことありました」(『古老が語るあつけし昔ものがたり第3集』p103)

この談話からは、どのような種類のクジラが漂流していたのか、クジラが追ったものがニシンだったのかイワシだったのか理解することはできない。しかし、当時の厚岸湾付近の生態系と厚岸のニシン漁業を考えるのに、クジラや後記するアザラシやトドなどは厚岸湾内そして近海における海洋動植物の食物連鎖を考えるにあたり重要である。

4. 昭和期

厚岸ニシン漁は大正末期から衰退し、昭和になるとわずかに小ニシンが続けられていたに過ぎなくなった。中島菊次郎は奔渡での「氷網でとれる魚はコマイ、チカ、キウリ等で、ニシンは何年かに一回とれる位のもの」、と述べており、冬期ニシン漁も不漁、よくて不安定といった状態であったようだ(『厚岸今昔物語』p68)。4月から5月にかけて来遊する大型のニシンは昭和2年にかなりの漁獲があったが、大黒島でのニシン漁獲は昭和2、3年頃からすでに皆無の状態となったようで、古老らはこの原因を沖合漁業の発展によって7、8海里の漁道が鎖されたからと述べている(『厚岸の史実』

p117)。小原ミヨは、「わたしが三十いくつの時だから昭和に入って、すぐだね。その頃になったら鯿がね、とれなくなりましたもの。そのあとも何軒かやっていたが、全然獲れないので誰一人やる人いなくなりましたよ」、と回顧している(『古老が語るあつけし昔ものがたり第3集』)。春先も定置網で春ニシンを漁獲していた。藤田政一は、森林伐採とニシン来遊の減少が同時期に起きつつあったことを示唆している：

「尾幌も明治から大正を経て昭和の初めまでは比較的平和な歳月が流れたことであるが、昭和六・七年遂に「尾幌最悪の年」がやってきた。山では原始の大密林を伐り尽し、浜では小鯿大漁の夢がさめておわたったのである」(『厚岸の史実』 p99)

また、金橋薫は以下のように述べている。

「まず小鯿漁については、子供の頃から大漁だった記憶があります。漁場は真竜から門静、苦多、敏内仙鳳趾に至る湾内で、初めは大規模な曳網でしたが、それがだんだん建網に移行したのであります。経営者を親方と称し、使用人は四、五十人を使っていたようです。小鯿はバカニシンとも称して十五センチ位の未熟鯿で非常に油のある魚。それを粕にたき油を搾ったものですが、この魚粕と魚油は当時の代表的水産物であったわけです。しかしこの時代にも二十五センチ以上の抱卵鯿(春鯿)はとれたものです。この小鯿は三十年ばかり前から回遊しなくなったので、今度は個人個人で刺し網を使って食料鯿をとるようになりました。しかし、これも二十年ばかり前から回遊がすくなくなったので、湾内から沖合漁業に転換し、床潭を中心に鱒釣り漁業になったのであります」(『厚岸今昔物語』 p32-33)

春ニシンは12年以降ほとんど姿を見せなくなり、建網も自然放棄されるものが多くなった。小ニシンも捕獲されていたが、大正時代と比べると比較にならないものであった。しかし昭和18年からまた復調の兆候をみせ、昭和20年に1800トンを超える漁獲があり沿岸漁民に朗報をもたらす。昭和18、19年のニシン漁に関して三村兼門が話している。

「昭和十八、九年の鯿の大漁は忘れることはできません。十二月二十五日から一月十五日にかけて、湖内で大型鯿が五十万貫(1,875トン)も獲れたものです。オカレンボシ(今の住の江町)では、結氷の割れ目から吹き出る鯿を呷に二俵も拾った人がいるぐらい。何せ非常に寒い冬だったので流氷のため真竜側にも渡せず、市場にも揚げきれないので止むなく今の保育所のところに一山と倉庫の前に一山、市場の庭先に蓋や真と合計四つの山にして野積みしたが、一山は十二、三万貫の大型鯿だからすばらしく見事な鯿の山でした」(『厚岸今昔物語』 p47-48) ニシン豊漁年の冬の奔渡でみられた“ニシンが氷下から吹き出していた”という現象は、筆者もF氏から聞く事が出来た：

「氷網にニシンが入る年と入らない年があるけど。ほとんどの人が氷下網建てる。ニシンが入った年に時は下を見ると、ニシンが氷の上から見えるんですね。氷にくっついてる。そこにこう穴空けて、網建てるようにすると、だーっとニシンが出てくる」

田口省一郎も「鯿は氷網でよくとれたことがあり、大漁だった時には魚が氷にはさまれたという珍しいこともありました」、と語っている(『厚岸今昔物語』 p46)。F氏はタ

モ網でニシンを掬っていたこともあるが、氷から吹き出したニシンを集め、町内にくる買い付け人に売って小遣いにしていたものだと話した。



図3 ニシン漁の様子。人力で船を挙げるのと刺し網からニシンを外している様子がわかる。昭和30年頃か。(写真提供 宮川佳治氏)

また余談であるが、昭和20年に太平洋戦争が終結を迎えた後、ニシン粕やイワシ糠は米と交換されるなどしていたそうだ(『古老が語るあつけし昔ものがたり第3集』p62)。

「食べ物なかったよ、ここも。終戦後にね、そういう魚粕と交換をした人がいる。...って、粕と米を交換する。だから国にやってくれたんね、あれね」(D女史)聞き取り調査に協力してくれた方の中には、戦地に送られてその当時厚岸にいなかったという方もおられた。ニシンや魚も配給品であつたらしく、当時の漁獲物がいかに厚岸で取り扱われていたか、厚岸の漁業史を考える上で興味深くまた研究価値のあるものであろう。

5. 昭和中期：最後の豊漁期

釧路・厚岸では昭和30年(1955)から昭和44年(1969)までの15年間、最後の豊漁期に入る。戦後厚岸のニシン漁は、小ニシンが23年(1948)、27年(1952)、28年(1953)も大漁であった。昭和30年から根室落ちといわれる春先の大型鯨の大漁が続き、33年(1958)、42年(1967)には戦後史上最高の漁獲を記録する。日本海ニシンの来遊の途絶後に、日本海側の主産地から多くのニシン親方と雇い人が厚岸へと移ったことは記録され、人々の記憶にも残っている。春ニシン漁の時期には、「日本海の親方たちが漁夫を引き連れ、地元漁民との共同経営という形で割り込んできたし、道内外の出稼ぎ漁夫もどっ

と入り込んでいる。その数三千人」(北海道新聞1959年3月14日)、とニシン来遊が途絶した日本海側から多くのニシン漁業関係者が厚岸に入った。

道東における豊漁期のニシン漁を時期的に二つに分けられることがある。前半は10月から12月に小ニシンとよばれる未成熟魚を対象としたものである。氷下待網漁では、湖内東部、トキタイ川の河口あたりで操業されていたようだ。

「秋はシリパのほう为主体にして、そこで獲れなくなると、どっち通るかわかんねけども、厚岸湖内に氷を張ってくると同時にニシンが入ってくる」(E氏)そして後半は二月から4月の産卵ニシンを対象にしたものである。

「おそらくその秋獲れたニシンは、この湾内で産卵するよかも、汽水湖の中で産卵するニシンだったんでないかい。で、その汽水湖で獲れたら、獲り終わると同時に、だいたい沖から代わりが入ってくる。でそのニシンを我々、湾内の人はそういうニシンを獲っている」(E氏)

「一回ニシンはなんだかんだ丘さ入ってくる。丘さ入って、そして産卵して、出てくるんだ、ニシンでもんは」(L氏)

E氏は、秋に獲れるニシンは湖内で産卵するニシンで、湾内に来遊し産卵するニシンとは少し違う魚群であったと推測している。奔渡に住むJ氏は最近の傾向は「秋に門静・苫多でたくさん獲れると、湖内は(翌年の春)あんまり獲れないことが多い」と語り、豊漁期について語ってくれた門静在住のE氏の見知と合致する。

またE氏の談話は、ニシンはまず最初に来遊、産卵をし、その後、次のニシン群が湾内に来遊し産卵するという、厚岸ニシンの来遊と産卵地の選択について触れている点においても非常に興味深い。L氏の談話もそれを証左しているといえる。

豊漁期の春のニシン刺網漁では、目寸は二寸一、二分、三分と現在のそれよりも大きめのもので操業され、当時のニシン群にいかにか大型のニシンが存在していたことを示している。沿岸部ニシン刺網の好漁場は、北大臨界実験所付近と岸壁が整備される以前の若竹だった。また、真竜、若竹町、湾月町一帯も建網でニシンが漁獲された。

「筑紫恋、床潭とか、実験所の前がね最高の漁場だったの。あの、水深があるでしょ、ニシンが層が厚かった。だから(漁獲量が)大きいんだわ。こっちは2メートルぐらいしかないから。あっちならもう、7メートルも10メートルもあるから。だからニシンの層があつい。だから海の深いだけに、春の定置も大きかった」(E氏)

しかし後半の産卵ニシンを対象にした漁は、沿岸小定置、刺し網もさることながら、豊漁期には大黒島沖水深20メートルから200メートルの地域での沖刺し網が主漁場となっていた(『釧路の魚』1999年)。

「定置の若い方も来ていた。定置と刺し網も両方やってた。この前(奔渡)でもずっと、まあ沖にも、大黒のほうまで行った。追いながらね、さらに力のある漁業者はさらに沖に出て沖刺しする。だいたい水深300メートルぐらいまでだね」(H氏)

春ニシンの後は、桜ニシンそして「馬鹿ニシン」が漁業対象となった。数の子が入っている産卵ニシンである「春ニシン」は特に重要だったが、ニシンは6月以降も厚岸湖湾内で周期的に獲れたこともあったようである。昭和38年には8月に「夏ニシンが

びっしりが獲れた」と、F氏は語ってくれた。この夏ニシンは、魚个体そのものは小さかったらしく、桜が散っても厚岸湖湾内で餌探していた、季節知らずの「馬鹿ニシン」であったと思われる。

「ニシンの産卵時期は3月4月なのさ。その時に湖内を泳いでどっかで産卵場を探してる。それがずっと根付けで残った、それが5月、6月に入っていくとそれが桜ニシンと呼ばれた。」(H氏)

「外洋に出れなくて、湖内で回遊しているうちに熟してしまうのさ、人間でいう、もう17、8(歳)、漁師言葉でいうと、色気つかねえうちに成熟して、産卵する行為ばかり考えるっていうようなニシン。その辺にたむろしている。その大きさはっていうと1寸7分か8分で、小さくて、それを桜ニシンっていう」(H氏)



図4 厚岸漁協市場の前に積み上げられたニシン。昭和42年2月。稲葉憲三氏撮影・提供、宮川佳治氏所蔵

昭和33年(1958)には13,288トンの漁獲があった。「“一起し百万両”の大漁 待ってました！厚岸ニシン十万貫」(3月2日)、「獲れすぎて困る 二日間で40万貫の記録的大漁」(3月3日)、「早くも一億円を稼ぐ ニシン・ブームの厚岸」(3月5日)、という見出しが新聞紙上を踊った。しかしあまりの漁獲量に陸地での処理が追いつかない事態となった。「たちまち車は不足、貸車は回らない、箱はない、人はいない」という状態で、漁協漁協の卸し市場は一時荷受制限を実施した。しかし処理が間に合わないためにニシンがそのまま無駄になったというわけではないようである。昭和34年(1959)の漁についてE氏は以下の逸話を話してくれた。

「昭和34年の時に、うちの親父が刺し網で大漁したのさ。こんなんじゃ（水揚げと卸売市場の荷受が）間に合わないってことで、〇〇水産の冷凍船をこの沖に持ってきた。そいで、組合の職員が全部測って、それで全部よそ売りさ。組合（市場）通さなかった。それがニシンの豊漁の頃」

このような事例が特例だったのか、それとも頻繁に行なわれていたのかは定かではない。しかし水揚げ漁場で直接ニシンの売買が行なわれていたという事実は、過去にニシンが統計資料で示される漁獲高以上に漁獲されていた可能性を示唆している(図4)。

一方、豊漁期といっても通年の漁獲変動は大きく、毎年の水揚げ金額も漁獲高に合わせて大きく変動した。「気まぐれなニシンに町中が翻弄され」（週刊北海水産1968年11月25日）、1959年の厚岸では、1人10万円もの賃金を得られるという景気のいい話に人が集まり、翌60年には「一万人を超える労務者の入り込み」と「倍近い着業」があったのに、漁獲量は急減してしまったという(『新北海道漁業史』2001)。

それもあり厚岸漁業協同組合は、昭和35年(1960)、豊漁で巷が沸く一方で漁場割りや、建網の共同経営化、そして一人一漁業種類方式（定置、刺し網、沖刺し網のどれかひとつに限定する）など、厚岸のニシン資源を持続させようという資源管理対策に着手している。これらの漁業規制によって、ニシン漁労体の数を850から半減し、1960年頃には資本のかかる大定置の数は減少した（週刊北海水産1964年3月23日、北海道新聞1960年4月20日）。また、昭和38年(1963)からは厚岸漁協が厚岸湖にてニシン孵化放流を行なっている。大々漁だった昭和42年にも、建網に付着した受精卵20トン余りを厚岸湖カキ島周辺の浅瀬に下ろす天然ふ化させるという試みがなされている(北海道新聞昭和42年3月13日)。

また資源の減少は、異なる漁法を用いるニシン漁業者間での対立を発現させるものとなった。春ニシンを主体にニシン漁を操業する沿岸漁業者にとって、沖刺し漁や底曳き網による冬ニシンと漁獲は、春ニシンの資源量に影響するものがあるという懸念が存在した。急激に増加した沖刺し網には魚群探知機を設備した漁船もこの頃から登場し、漁業技術の近代化と資本化による沿岸ニシン漁業者と沖合ニシン刺網業者の間の技術格差がさらに対立を高めさせたようだ(『新北海道漁業史』2001)。ニシンのような共有資源(Common-Pool Resource)といわれる海洋資源は、その資源に関連する関係者が異種多様である場合、それら関係者間における信頼や連携関係などの有無が有効な資源管理のための重要な要素となる(Bronzizio他2009)。異なる漁法によってニシンを追う漁業者間に対立は競争を加速させ、ニシン資源に対してさらなる漁獲圧力をかけたであろう。

昭和42年(1967)のニシン漁は戦後最高漁獲高を記録する。「置き場に困る 戦後最高の大漁」や「ひと起こし一千万円」(3月9日)、「ネコの手もほしい現地」、「初漁で五億円 漁民もたまげる“バカ景気”」(3月13日)、と新聞紙上を賑わす大々漁であった(『商歴五十年史』2001)。

「流氷ずっところ岸に寄り上がってね。みてたっけ、ポントマリってところ、こう砂場なのさ。そこにね、もう、黒くなって砂がもうもこもこしてる。そしたら、上にこうゴメが飛んでいるのをみて、ああ ニシンでねえねのかな、って言い出す。それがね、午後の一時ごろだった。もう忘れねえんだ。そいしたっけ、門静の方からも二杯出てきたのさ。そっちの人はね、当時沖商売してた。沢... 漁に... ニシンの先に網入れたのさ。うちの親父はもう氷割ってようやく船出してい

ったもんだから、ニシンやや通過した後に入れた。それでもね、その年で80万。でそれが最後だったんだよね。それが最後」(E氏)

現在60代半ば以上の漁業者の中には、最後の豊漁年であった昭和42年のニシン漁を手伝っていた方々が多くおられる。船に乗って漁に参加していた方から、丘で旋網を引いていた人など様々で、「仙鳳趾からずっと真龍、湾月、愛冠、筑紫恋まで海岸線ずっと真っ白になった」(I氏)様子や漁の状況などについて話を伺う事が出来た。

ニシン資源が豊富な頃は、ニシンの来遊はまず大黒島あたりで確認されたようだ。ニシン群が見えたら、伝達が送られ、湖湾内の他の漁師にニシンの到来を知らせることがあった。

「昔ニシンの入り口さよ、ニシンがくることさ、糸を下げとくらしい。して見ればニシンが来るのがわかるらしい。寄ってくるのわかるって。やっぱり事実らしいぞ、触り糸って。ニシンがぶつかるものさ、どんどんどんどん、コッコかけんだべ。ニシンてのは不思議なもので、ぶつかるものなんでもこっこかける。細かい金糸がぶっとくなる。それでニシンが入ってきたことわかる。それだけニシン入ってたってこと。やっぱり昔獲れた所ってのは、さわりってのあったらしいぞ。糸の太さが、次から次とこっこかけていくから、段々太くなっていくんだ、金糸がな。そのぐらい、ニシンが獲れたもんだって」(L氏)

旋き網や刺し網は、ニシンの群来が見られた時に投網された。沿岸漁業者と、沖刺し漁業者の間には漁法はさることながら操業にあたっての漁業設備や資金力でも違いがあったようだ。

「おらが小学校の頃だったら、動力船てのあんまりなかったんだわ。この本当の沿岸、我々みたい漁業者にはね。櫓を漕いでてのが多かったのさ」(E氏)

沿岸刺し網や建網の際は動力船ではなく手漕ぎ船による操業が多かったようだ。沿岸に来遊したニシンの群来はとても「あつく」、その沿岸水面下のニシンの密度は「オールがニシンにあたって、ボートが漕げない」(I氏)ほどであった。

「ニシンはあれだぞ、おめえ。厚岸でほれ、一番すごいときいったからな。このうちも獲ったんだ。実験所のところ建ててた。白くなる、あの状態も起きたんだよ。真っ白で。郡来のところは真っ白、船さ入ってくべ、郡来のところは見えねえ、白くなってて、魚だか何だか。けどちょっと郡来のことずれてくれば底が見えてくるわけだ。すごいもんだもんな。ニシンな」(L氏)

「そいで網を入れるにしても、櫓を漕ぎながら網をこう伸ばしているんだけど、櫓にもうコツコツコツとニシンが当たる」(E氏)

「魚をぐるっとまわって、網刺すんだ。浅いところだもんから、船が(海底に)当たるわけよ。竿でつっぱりながら、そしてな、刺していくべ、一反、二反っていくんたら、もう最初の一反沈んでいくんだ。ニシンがもう狂ったようにかかってくる。みんな、沈んだ網、そしてニシンが沈んだ網の上(続いて)来るんだ」(L氏)

網に刺さるニシンが多過ぎた時は、網をあげることが困難だけでなく、あまりの重さに網が耐えきれず、ニシンが「足とアバだけ残して網持っていった」(L氏)のようなこともあった。

産卵ニシンを対象にした春ニシン漁では、ニシン群の「厚さ」もさることながら粘着性であるニシンの数の子が網に付着した際の手間がかかった。付着した数の子が大量で編み目が見えなくなることもあった(G氏)。

「もう途中ね、定置が二ヶ所もね、沈んじゃって。もう真っ白と白子出してね。もう沈んじゃって、揚げることもできない。そういう状態。だからもうそうなたらね、数の子かかっちゃって、ぬるぬるぬるってもう網引っ張ることできないんだ。もう万歳だ。ばんざい」(E氏)

「俺らが中学校ぐらいかな。ニシン郡来た一って、きいてすぐ帰ってきたらもう親父らが建網のほうさいて、建網は数の子かけちゃうと、沈んじゃうから。中に入った魚全部でちゃうから。今みたいにいいアバじゃない、桐のあばばっかだから、重みですぐ沈んちゃうでしょ。だからついてた魚すぐ起こしていかないと行けない。ヒマ無しに起こしていった。かけられないようにね。で、間違っただら、網上げてきて、今度数の子叩きしたんだ」(H氏)

数の子たたきで網なら外れた数の子はバラ子と呼ばれ、厚岸では数の子よりもバラ子のほうが美味だという人は多い。「バラ子は昔、チューインガムみたいにこどもに食べられた」(G氏)、「どんぶりいっぱいバラ子入れて、醤油をかけてな、食べるんだ。これがうめえんだ」(I氏)、という個人消費から、出面として手伝った後バラ子してもらい、それを丘回りの買受人に売って小遣いを稼いだ、と話す方もいた。

また、その当時湾月には身欠きニシンを専門にした加工業者が数軒あった。大漁で親世代が多忙の中、ニシン漁を手伝っていた当時の子ども世代は、数の子が入った大型のメスニシンをこっそり加工業者に持っていき、小遣いを稼ぐということがよくあったようだ。かなりの高値で買い取っていたらしく、厚岸ではまだニシンは「幻の魚」とはなっていなかったが、日本海ニシンの来遊がすでに途絶していたこともあり、豊漁期末期の1965年代後半には数の子はすでに「黄色いダイヤ」としての希少価値がついていたようである。

「39年、40年頃のあの2寸4分のね、子が入ったら1尾400円とか500円した、最後はね。それをちょっと(親の目を盗んで)〇〇さんに持って買ってもらった。小遣いにするため。鮮魚でね」(E氏)

大豊漁だった昭和42年のニシン漁だが、驚異的な漁獲量ゆえ、ニシンの処理だけではなく様々な問題が漁業者の回りに起こったようだ。当時厚岸漁協組理事を務めていた長崎勝利は「厚岸ニシン大漁 とまどいの記」と題したコラムを掲載し、その中でニシンの盗難が相次いだことを報告している。「最高九十箱(当時約四〇万円相当)の被害をトップに」、とされているが、実際はその当時報告されなかった事件も多い可能性がある。豊漁期に建網漁に従事していた漁師は、自身が経験したニシン盗難について語ってくれた。

「ニシンが獲れて獲れて、建網から船にいっぱい積めてくるべ。全部たもて揚げてな、箱積みするんだわ。80や100箱だ。そしたら、『どうも一組合で一す』、

ってくるんだ。『すぐ持っていくのかあって』、て言ったのよ。場所がねえから、車なんて珍しい時代だから。トラックがくれば珍しくてよ。片付けてもらえたらいいから、『すぐ空箱持ってきます』って。『そうか、頼むぞー』って。こっちは網からニシンとらないといけないから。そしたら『組合で一す』ってまた来たんだ。『えらい組合くるなあ、さっき 150 箱ぐらい持ってったど』。したら、『あ～L さん、やられたわ』って。もう手遅れよ」(L 氏)

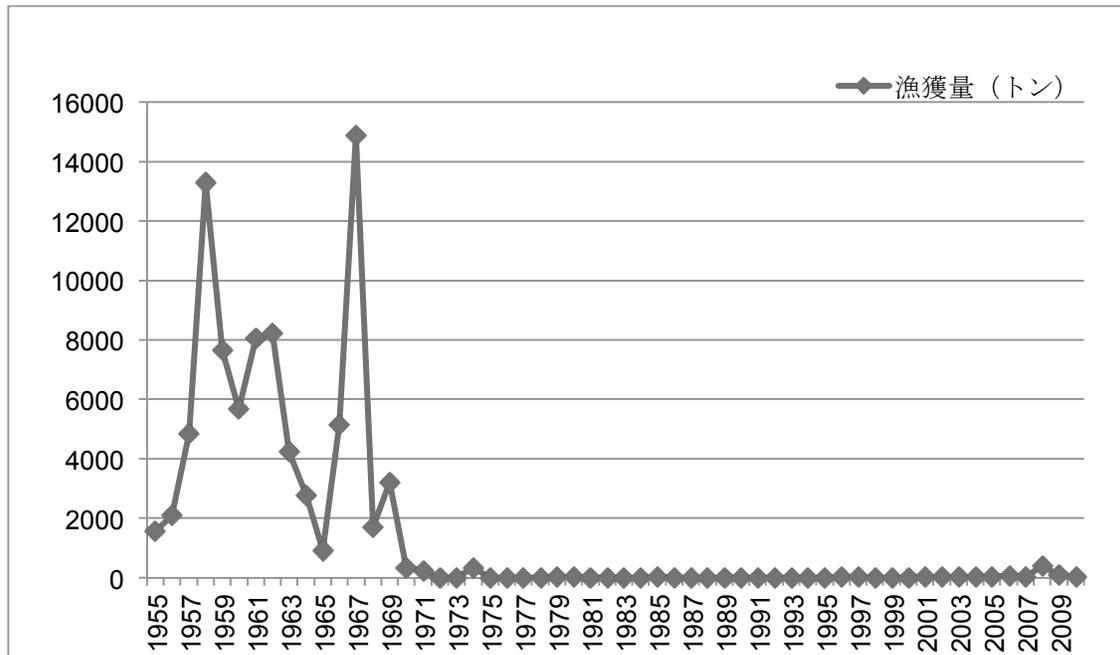


図5 厚岸におけるニシン漁獲量 (昭和55年～平成22年)

このような盗難や、市場を通さずにニシンを浜売りするということがもし頻繁に行なわれていたなら、実際の漁獲量は統計資料にあるそれよりもさらに高かった可能性が高い。昭和42年に戦後最高漁獲高を記録した厚岸ニシン漁業だが、その後43年は1,718トン、44年は3,208トン、そして45年には336トン、46年には235トンと激減、昭和47年には漁獲量は2トンとなり、ついにニシンは厚岸でも「幻の魚」となった(図5)。

考察：ニシン生態環境と基盤変化

ニシンの漁獲量は大きく変動しながらも減少の一途をたどり 1970 年以降ニシンの来遊はほぼ途絶したと言っていい。ニシン資源の減少についての原因は定かではないが、乱獲、産卵藻場の消滅、海洋環境の変化などの複合要因によって引き起こされたのではないかと考えられている。春の海水温が高温時代に入ったことが、厚岸湖内でニシン稚仔魚が餌をしていた動物プランクトンの繁殖に大きな変化をもたらし、十分な餌にありつけなかったことが厚岸ニシンの途絶へ繋がった、という説がある。逆に好漁の原因は、餌生物であるプランクトンの繁殖がよく、ニシン稚仔魚が餌にありつく可能性が高い時に起きるといふ(『釧路の魚』2000)。

しかし沿岸海洋生物の生態の考察には、我々人間の活動が及ぼしうる人為的な海洋環境への影響も考える必要がある。海洋環境の変化による海水温の変動はニシン生

活史に影響を及ぼしたであろうが、春の海峡が再び低温時代に入った1976年以降もニシンの来遊は皆無に近く、その後のニシン資源の回復は未だとてもゆるやかなものとなっている。もし海水温の上昇のみがニシン来遊途絶の原因であるならば、厚岸およびその他道東の沿岸部ではまた春ニシンの群来が見られているはずである。我々人間の活動は浅瀬で産卵するニシンのような回遊魚の生態環境に影響を及ぼした可能性をふまえ、ここでは文献資料と聞き取り調査からの情報を中心に、いかにニシンの生態環境が変化してきたかを改めて考察する。

昔のニシン漁の頃の厚岸湖・厚岸湾について訊ねたとき、聞き取り調査で参加者が語ってくれたものの中で特に三つの環境的变化についての話が多かった。流氷、開発、そして漁業技術の発達とそれを伴った乱獲の可能性である。ここでは、これらに関しての談話を紹介しながら、ニシンの来遊が途絶した頃に厚岸住民が観察していた自然的、人為的環境変化についての資料を集めた。

1. 流氷と沿岸海洋生態系

まず情報提供者の多くが流氷に言及し、流氷が接岸した年はニシンがよく獲れたと語った。この傾向は昭和中期の最後のニシン豊漁期のみならず、それ以前のニシン漁に関しても古老らが言及していたことが文献資料から見られる。

「まず間違いなく千島氷が入った。流氷が、間違いなくこの湾内にもうあふれるぐらい入った。毎年。ニシンの頃ね。毎年流氷入った。それがずんずん二年に一回とか、三年に一回となつててね、今はじゃもう、幻みたくなって。十何年ぶりで一部のこの接岸したとか」(E氏)

E氏が住む門静では千島氷が毎年入っていたらしいが、奔渡の古老は、流氷は毎年湖内まで来ていたわけでない、と語った。しかし、現在よりも以前は気温が低く、何年も連続で流氷が湖内まで来ても別に驚くようなことではなかったらしい。

「流氷がきて、流氷がこう接岸して、ぽろぽろ海面が空くようになったらその下にニシンがいた。だから、俺ら気の早いほうは、こういう氷をツルハシで割ったりなんだりして、船を下ろした。でその中でもって、ニシンを獲る」(E氏)

分厚い流氷が湾内に入ってきた頃は、流氷が海藻を引き抜きながら移動していたらしい。引き抜かれる海藻の中にはコンブも含まれ、その影響は相当のものであったらしい。主要水産物であるコンブを引き抜いていく流氷だが、筆者が聞き取りをした漁業者からは流氷がもたらす恩恵についてのものが多かった。流氷はコンブ繁生地に共生するその他の(漁業者の観点から見た)雑藻を引き抜き、コンブの繁殖を促進するらしい。コンブも引き抜かれるが、「(それによって)若いコンブが育ちやすくなる」(I氏)そうだ。I氏はニシンが獲れた頃の流氷は「青い氷」であったと話した。

「青い氷な。あれは下が白くねえんだ。してな、栄養素をいっぱい持ってくる」(I氏)

「やはり氷が張ると、ニシンはよってくるね。氷の下つつのは、プランクトンがいるのかね。あの千島氷が入ってくる頃、必ずニシンもひつついてくるよ。それはやっぱプランクトンが多いんだ。プランクトンが溜まる。それをニシンがついてくるから。沖のほうから入ってくるよ、ついたらかなりニシン入ってくる」(F氏)

「栄養を(厚岸に)置いていってくれる。その年は駄目だが、次の年(のコンブ)はいい」(M氏)



図6 流氷と厚岸湖結氷の様子。昭和30年代。稲葉憲三氏撮影・提供、宮川佳治氏所蔵

ニシンは産卵にアマモ類やホンダワラ、コンブなど海藻の繁茂地を利用する。ニシンの来遊がまだ豊富だった頃、湾内の沿岸沿いの多くの区域でホンダワラなどが群生していたらしい。

「ゴ藻つかホンダワラが成長してくるのは4月。ニシン(来遊の)時はまだ前の年から残ってる茎だけみたいな状態だ。(ニシンは)その茎みたいなのに卵つける。湖の中はアマモだ」(I氏)

流氷が担っていた可能性があるコンブやその他の海藻群落地の「自然管理」というべき生態系機能の喪失は、ニシンの産卵も場の様子や孵化率などに影響を及ぼした可能性があるといえる。水温変化は、地域的なマクロな環境変化も影響するが、地球温暖化など広域的な環境変化も影響している可能性がある。どちらが原因にしろ、千島氷が厚岸まで来ていた頃はニシンも獲れたという共時性は、海水温などの海況とニシンにとっての餌環境の関係の観点からも注目する価値がある(図6)。

流氷の次によく聞かれたのはトドである。ニシン豊漁期の頃はアザラシは乱獲されて数が激減していたよう(E氏)で、トドによる被害がより深刻だったようである。トドは流氷による湖湾内の結氷が少し落ち着いた頃、ニシンが来遊する時期に厚岸に姿を現していたらしい。

「それで、氷の間がかなり空いてくると、トドね。(中略)何百だ。何十頭って固まって、もう群れなくなってんだもん。だから、ニシン追っかけて 網にかかっちゃうと、もう網なんかもう全部終了」(E氏)

以前はトドもアザラシも湖内まで入ってきていたらしい。しかし、「(トドとアザラシは)ニシンを追っかけてくる。魚がいなくなったら(トドとアザラシも)いなくなる」(C氏)、と湖内に来るのはニシン来遊の時期のみだったと語った。春先ニシンを追って厚岸に姿を現していたトドを今は一年を通して目撃することがなく、「やっぱニシンいねえんだな」(L氏)、と年配の漁師は呟いた。

その他のニシン(卵・稚仔魚)を捕食しうる生物に関しては、門静の近くの住吉などでマツカワが豊富だったらしい。マツカワは今のものよりもとても大きなサイズだったらしい。その大きさは「座布団だった」(E氏)というほどで、長さは50から60センチメートルに及び、厚さも5センチメートル以上あったという。一方、水揚高統計を見ると、他にもマグロ、オヒョウ、サメの漁獲量が減少そして姿を消している。時々オヒョウもアキアジ建網にかかっていたそうだ。また、シラウオの時期には建網にイトウが「邪魔くさい」(E氏)ほど乗っていたそうだ。ちなみにもう一つのニシン捕食動物であるクジラだが、明治以前には、クジラが流氷やシャチなどによって海岸に寄せたことも多かったらしい(『厚岸町史・上巻』p423)。ニシン稚仔魚や未熟な餌索ニシンを捕食する他の魚類や海洋ほ乳類が、ニシンと共に減少または個体の小型化の傾向があるのは注目に値する。

厚岸湖に関しては、牡蠣島とその他の動植物についての話が多かった。明治 24、25 年頃の牡蠣島は、現在と比べてとても大きく、他にもハマナスやアッケシソウなど草が群生した島が 20 ほどあった(『厚岸の史実』)。地図や写真などの資料を見ると、現在の牡蠣島神社のある場所には青年会館があり、「子供の頃だったけど、花見になると賑やかだったものだよ。桜の木は 20 本ぐらいあった」(F氏)らしい。しかし、昭和期にはその様子は大きく変わっていたようだ。

「今みたく牡蠣島がなかった。本当天然の牡蠣島しかなかった。人口の島が全くなかった。今の弁天島が大潮になるとでるくらい。後は全然でないって」(E氏)

湖面に見えていた天然のかき島が目視されなくなっていった背景は定かではない。厚岸も経験した数多くの地震などが原因による地盤沈下や津波の影響などの可能性はあるだろうか。しかしもしあっても、ある地震などで短期間に牡蠣島が沈下すると、それは古老など当時を知る住民が記憶しているはずである。

また牡蠣の大きさは以前大きかったらしく、厚岸住民の家に招かれると玄関に殻が 20cm 近くもあるかき殻を飾っていることがよくある。以前は餌となるプランクトンの繁殖量も高く、牡蠣の成長が促進されていたのかもしれないし、養殖前の牡蠣の個体数は今より少なく、それゆえ牡蠣一体一体がより多くの餌にありつけたという理由も否定できない。

厚岸湖内の生物多様性もしくは資源量は、プランクトンなど以外に、住民が観察できる範囲でも現在より高かったようである。

「その頃は、わしら子供の頃は、いろんなちっちゃな魚いたもんだよ。こんな網でね、がちゃっと掬えば、牛乳瓶みたいなの中に入れて、そのなんぼにも次から次と、カジカだとかカレイとか。あれだけいたもんだ」(F氏)

「いろんなちっちゃな魚」の中にはニシンの稚仔魚も入っていたのでは、と想像してしまう。また、他に当時よく見られた生物にカニがあげられた。

「その頃いがったのはね、今全く見えなくなった藻屑蟹ね。爪にこう毛がおがったやつね。ああれがすごかった。あれが多かった」(E氏)

「湖の中の、蟹ね、なに蟹だったかな。たいしてあったの。籠で獲るんだけどね、こんぐらい、おにぎりみていな籠で、んでガラスいれて、あれを籠で獲って、1トンもない、そのぐらいの船でがっさりいっぱい獲れるんだ。それを獲ってきてね、一回ゆでるんだね。それを干して、つぶして缶にして出荷する」(B氏)

「今たまぁにいるけどな。一匹は二匹いるね、湖内に。あれがすんごい。暖かくて潮引くと、全部あがってんだ」(C氏)

古老が話してくれたこれらのカニは、クリガニやモクズガニだと思われるが、モクズガニなど他のカニであったという可能性も否定できない。確認ができなかったが、そのカニを見た、今でも見るという人は、そのカニは藻が沿岸一面に繁生する場所に多く見られる・見られた、と述べている。カニはニシン卵を食べるようだが、生態系食物網の観点からニシン来遊の途絶とカニの減少の関係もさらに調べていきたい課題である。

そしてニシンと同じ時期に見ないようになった。もうひとつ「消えた生物」としてよくあげられたのがオゴノリであった。以前は寒天の原料として、漁業権も管理されて収穫されていた。奔渡の古老は、彼がよく見たカニとオゴノリが同じ頃から見られなくなったと語った。

「(オゴノリ)も長いやつと短いやつとあるからね。あの長いのなら、時化たら、その場所でこういうなんぼでもとって積んで山してこれるの。それもてんでいなくなった。今は短いのがちょっと。長いのはないね。長いのも、やっぱ湖内の水がなんなのかわからないけど、いなくなったね」(A氏)

2. 港湾開発

ニシン豊漁期を懐古して話す中で、多くの聞き取り調査参加者が述べたのが、護岸整備を含む港湾工事であった。沿岸部の開発の環境への影響は、明治時代後期から厚岸住民の中の意見として残されている。厚岸町の地図を時代別に見ると、沿岸景観がいかに変遷してきたのかがわかる(図7、8)。ニシン豊漁期前後に関しても、奔渡の古老は、港湾開発によって厚岸湖内と湾を行き来する水の流れと水量が変化したのでは、と指摘した。「潮が止まった」(F氏)など、湖内と厚岸湾の間での海水の流れの変化についての意見は、厚岸大橋が建立される前から奔渡に住む住民の中に特に聞かれた。

「ここの橋の三分の二ぐらい狭くなったでしょ？埋め立てて橋を立てたからね。その当時は橋もなにも無い時代。水の出る量も変わったでしょ？入り口が狭くなったら、水が出る前に。流れも変わるもんな」(B氏)

「川から流れてくる水があればもんね、あれからすぐこっち来てたんだよな。橋の方に出てきた。今は雨が降ったら弁天のどこまでくるようになった」(C氏)

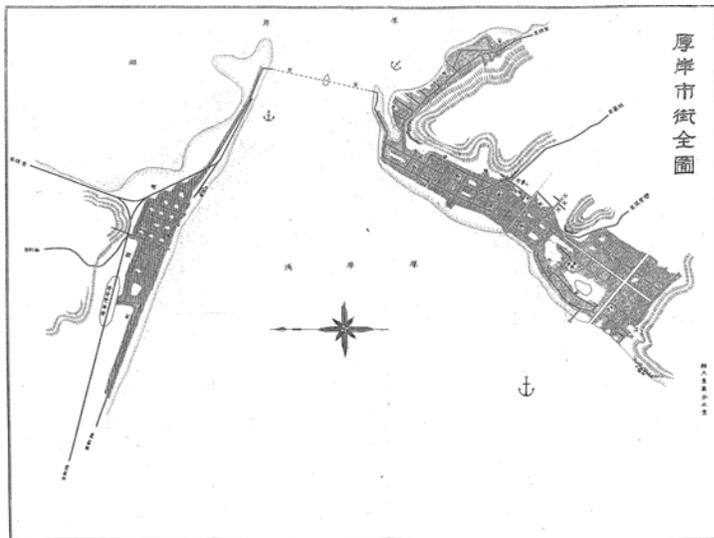


図7 大正6年(1917) 厚岸市街全図。『新厚岸町史』より。



図8 平成17年(2005)厚岸町。国土地理院国土変遷アーカイブより。

沿岸部における人為的環境変化とニシン来遊の途絶を関連づける年配漁業者もいた。

「前浜の藻がなくなった。やっぱニシンがいた頃は、ここら(湾月からバラサン、愛冠にかけて)の前浜に藻がびっしりあった」(I氏)

「ニシンが獲れなくなったのは昭和45年、で終りなのさ。それが最後なのさ。ま、まだまだ、地域にはまだ来るべってような思いもある。でもやっぱり、これだけ海を変えちゃって...。言うなれば、根付け漁業なのさ、ニシンの場合は。藻場で産卵してその土地に戻ってくるっていうのがひとつ。その産卵する場所がなくなっちゃった。その護岸整備で」(H氏)

また、湾月に住む方々は、沿岸に栈橋があり港湾整備が行なわれる前はシオムシなども多く生息していた、と語った。護岸整備や漁港の拡大により様々な恩恵がある一方で、ニシンの産卵場としての沿岸海洋生態系を大きく変えてきた可能性がある。早くは明治40年代の湾岸部での採石事業にはじまり、戦後の厚岸港整備などで昔来遊したニシンが産卵し群来が観察されたエリアの地形は大きく変わってしまったといっている。現在も続くといわれる厚岸湖内における土砂の流出と地盤沈下とともに、ニシン産卵場がいかにかに人為的影響によって喪失されたのかというプロセスを理解することは、今後のニシン資源回復のためにも重要である。

3. 乱獲

最後に、ニシンの生態環境の変化に直接影響した人為的要因としてあげられるのは漁獲圧力である。ある元漁師は、ニシン豊漁期とその後の来遊の途絶を振り返り、その理由のひとつとして「(技術的に) いいものが出来過ぎた」(K氏)ことが挙げられた。昔は、漁業者は位置や方向を確認するのにコンパスや、門静付近にあった灯台を陸標として利用していたようだ。しかし、漁船は手漕ぎ船や和船から船外機船を含む動力船へと変わり、沖刺し網で使用されるようになった新しい魚群探知機やその他の計器類は、沖刺し網操業を効率化させた。これら漁業の機械化によって、ますますニシンを逃がさず「育てない」漁業となっていった。建網も改良され、一度入れれば魚が出ることが困難な網な、ニシンを「一網打尽」にする漁業となった。

ニシン豊漁期の昭和33年3月3日の北海道新聞は、厚岸がニシンで溢れる様を「浜はまさに殺人的ニシンの大漁でござった返した」、と表現している。昭和33年や42年などの大々漁の年は、

「郡来のところは真っ白、船ははいってくべ、郡来のところは見えねえ、白くなって、魚だかなんだか。ところがちょっと郡来のとこずれてくれば底が見えてくるわけだ。すごいもんだもんな。ニシンな、こんな、もう、先に向かって、おめえ、日本人っての欲だな、魚をぐるっとまわして、獲る気なってよ。網刺すんだ。浅いところだもんから、船が当たるわけよ、竿でつっぱりながら、そしてな、刺していくべ、一反、二反っていくんたら、もう最初の一反沈んでいくんだ。ニシンがもう狂ったようにかかってくる。みんな、沈んだ網、そしてニシンが沈んだ網の上くるんだ。それまで獲ろうとしたその上にまたさすんだ」(L氏)

他にも「とにかく、いるだけとった」(E氏)と回顧する年配者もおり、当時を思い出すとニシンが“獲れた”という意見もあれば、“獲り過ぎた”というニュアンスの談話も聞かれた。資源保護のための様々な漁業管理も実施されていたようだが、権利(共同漁業権)がある限り獲れるだけ獲ったというような、ニシンという共有資源の資源管理の実践が不十分または徹底さが欠如していた状態であったために、乱獲を許したのかもしれない。

結びにかえて

本研究は、厚岸ニシンの生態環境変化について、フィールドワーク(実地調査)を通じて行う聞き取り調査や参与観察、文献資料調査などの民族誌学的研究手法を用いて考察した。文献資料からは、ニシン漁が発展する一方で、漁獲量が激しく変動しながらも減少した傾向が改めて確認できた。ニシンが厚岸湖湾に多く来遊していた頃

の沿岸海洋生態環境についても情報を収集することができた。また、まだ文章化した形で残されていない、ニシン豊漁期の浜の様子などについても聞くことができた。そして、厚岸のニシンに関して文献資料そして聞き取り調査で特に挙げたのは、港湾開発と流氷、そして漁獲圧力であった。

昭和中期のニシン漁については、今でも多くの方が鮮明に覚えられているように、今回の聞き取り調査を通じて感じた。それゆえ、現在のところ記憶されている環境知識という点に関しては Robert のいう過去の海洋環境を忘れる「集団記憶喪失」(collective amnesia)は起きていないといえる。その上で、歴史的に見ると現在のニシン資源量はとても少なく、厚岸での漁業対象としてもまだかなり不安定な状態である。この少ない資源量のニシンの来遊が、今後「当たり前」ととらえられる基盤変化 (shifting baseline) のようなことは、沿岸海洋生態系の回復や保全、そして漁業資源管理の観点からも避けられなければならない。

本研究を振り返ると、聞き取り調査の回数や参加者のサンプリングの偏りがあり、当初目的としていたほどの成果をあげることができなかった。聞き取り調査に関しては、年配漁業者を対象にした情報収集は一定の成果があったが、高齢者、特に80代を超える方からとの聞き取り調査はあまりできなかった。そして、元・年配漁師が持つ、ニシンの生態行やその他同じ沿岸海洋生態系に属する生物についての生態的・環境的知識についての情報収集も極めて断片的なものとなってしまった。また、水揚げ後のニシンの分配、加工そして消費に関しても、情報収集が不十分であった。その結果、厚岸住民の知見からの「ニシン生活史」の構築、そして厚岸におけるニシンの文化に関しての情報収集そして考察ができなかった。今回の研究からこれらの反省を踏まえて、今後さらに地元住民、特に高齢者と年配女性の方からの聞き取り調査などを通じて更に資料収集を進めていきたい。

反省と問題点が残った本研究だが、その中でも厚岸における今後の沿岸海洋生態系の研究に役立てられる資料を収集できたのではと思う。本研究で顕在化した流氷、港湾開発、そして漁獲圧力の三点は今後他分野の専門家の助言を仰ぎながら考察を続けたい。流氷については人為的な操作による生態系機能の回復は難しい。しかし、流氷の成分分析などが進めば、今後本研究で収集された現地漁業者の持つ環境知識と科学的知見を組み合わせることによって厚岸湖湾の生態環境変化のさらなる理解に繋がるものであろう(廣瀬 2004)。回遊するため必ずしも厚岸湖内で通年で生息するわけではないニシンの生態環境を理解、そして回復や維持するために、地元住民が語ってくれた海藻やカニそしてシオムシなどの小生物に関する情報は、それぞれの生態学に詳しい研究者から教示を頂くことによって、今後の資源管理計画に有効利用することができよう。

そして現在、厚岸では現在北海道区水産研究所によってニシンの放流研究が進められ、近年では数十万匹のニシンの稚魚が厚岸湾に放流されている。しかし、今後のニシン資源量の回復には、ニシンの産卵場となる藻場回復だけでなく、ニシン稚仔魚の生息域の保護や、若齢魚への過度の漁獲圧力を防ぐなどの漁業管理が必要である。ニシンのような回遊魚を含めた生態系食物網は複雑で、沿岸生態環境の変化とニシン漁獲量の因果関係の理解はさらに継続的で総合的な研究議論を必要とする(Alder 他 2008)。資源管理に地元漁業者や地元住民の持つ環境知識の有効利用するためにも、今後さらなる調査が必要である。

謝辞

本研究の遂行に際し、厚岸町の教育機関そして個人から様々なご協力を頂いた。厚岸町水鳥観察館には、調査を進める上で数々の便宜を図っていただいた。厚岸町海事記念館には文献資料を収集する上でご協力を頂きお礼申し上げる。現地聞き取り調査では、厚岸町湾月、奔渡を中心とした多くの漁業者、住民の方々およびそのご家族のご協力に心から御礼申し上げます。特に突然の来訪にも関わらずいつも様々な事を丁寧に教えていただいた浜野誠一氏、葎ヶ浦政美氏、そして写真など貴重な資料を提供してくださった宮川佳治氏に感謝を申し上げたい。また本調査の遂行にあたり、北海道区水産研究所厚岸庁舎、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター厚岸臨海実験所の研究者の方々からは、生物学や生態学見知からの貴重なご助言を頂いた。厚く御礼申し上げます。

引用・参考文献

厚岸水産物買受人組合

2001 商歴五十年史.

厚岸町史編さん委員会編

1975 厚岸町史 上・下巻. 厚岸町

2007 新厚岸町史 資料編3 自然・統計編. 厚岸町

厚岸町教育委員会

1991 古老が語るあつけし昔ものがたり 第一集.

1993 古老が語るあつけし昔ものがたり 第三集.

Alder, Jacqueline, Brooke Campbell, Vasiliki Karpouzi, Kristin Kaschner, and Daniel Pauly

2008 Forage Fish: From Ecosystems to Markets. *Annual Reviews In Environment and Resources* 33:153-166.

Baum, Julia K., and Ransom A. Myers

2004 Shifting Baselines and the Decline of Pelagic Sharks In the Gulf of Mexico. *Ecology Letters* 7(2):135-145.

Brondizio, Eduardo S., Elinor Ostrom, and Oran R. Young

2009 Connectivity and the Governance of Multilevel Social-Ecological Systems: The Role of Social Capital. *Annual Review of Environment and Resources* 34(1):253-278.

廣瀬孝太郎

2004 厚岸湖・別寒辺牛湿原の過去数百年の環境変遷と人口改変の影響. 平成 16 年度 厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究報告書:Pp.11-23

今田光夫

1986 ニシン文化史：幻の鯨・カムイチェップ. 札幌: 共同出版社.

「釧路の魚」研究会

2000 釧路の魚. 釧路市.

小林時正

- 2002 北海道におけるニシン漁業と資源研究（総説）. 北海道水産試験場研究報告 62:1-8.
- Okada, Atsuko
1998 Maritime Adaptations In Hokkaido. *Arctic Anthropology* 35(1):340-349.
- 大谷乾一郎
1968 厚岸の史実: 厚岸町役場.
— 1973 厚岸今昔物語.
- Papworth, S.K., J. Rist, L. Coad, and E.J. Milner-Gulland
2009 Evidence for Shifting Baseline Syndrome In Conservation. *Conservation Letters* 2(2):93-100.
- Robrert, Callum M.
2007 *The Unnatural History of the Sea*. Washington, DC: Island Press.
- 坂野榮市
1952 厚岸灣の鯨に就いて(1). *水産孵化場試験報告* 7(1,2):157-161.
- 新北海道漁業史編さん委員会編
2001 新北海道漁業史-戦後 50 年の軌跡-. 北海道水産林務部.
- 谷本晃久
2003 アイヌの「自分稼」. 菊池勇夫編『蝦夷島と北方世界』 Pp. 199-231.
東京: 吉川弘文館.
- Thornton, Thomas F., Virginia Butler, Fritz Funk, Madonna Moss, Jamie Hebert, Tait Elder, Robi Craig, Shingo Hamada, and Adela Maciejewski Scheer
2010 Herring Synthesis: Documenting and Modeling Herring Spawning Areas with Socio-Ecological Systems over Time in the Southern Gulf of Alaska. North Pacific Research Board.